

Rapport

2025
Number

130

多摩大学 | 広 報 誌 |

Vol.130 Contents

国際社会学会国際観光部会 2025 会議を開催・運営	02
【教員研究紹介】 田中孝枝 准教授	02
済州平和フォーラム 報告	03
2025 年度第 1 回 SRC	04
インターゼミ夏季合宿	04
多摩大ジャーナル No.46	05
【ゼミ紹介】 今村康子ゼミ	06
【実施報告】 ジェロントロジー企画第 15 弾「稲刈り体験 × 講座」	07
多摩キャンパス 防災拠点化構想	07
【学園祭のお知らせ】 多摩祭 /SGS Festa	07
後援会報告	08

国際社会学会国際観光部会 2025 会議を開催・運営

2025 年 6 月 19 日～ 22 日、湘南キャンパスにて、本学の研究・教育とも関連が深い、観光に関する国際社会学会国際観光部会「ISARC50 Interim Conference 2025」が開催されました。多摩大学は、開催・運営校として同学会の運営を担うとともに、専任教員による研究発表も行いました。グローバルスタディーズ学部（以下、SGS）からは、分科会「人と人以外の生物にとって良い未来のための観光」に 6 名（太田、田中、堂下、韓、李、Erik）の教員が登壇、経営情報学部からは、分科会「自動運転を活用した観光地域活性化」に教員 4 名（出原、新西、高橋（恭）、樋笠）と学生 1 名（経営情報学部 2 年：大室晴菜さん）が登壇しました。専門分野の異なる総勢 10 名の教員が、学会テーマ「観光における人権」に関する研究発表を英語で世界に向けて発信しました。

6 月 20 日のオープニングセレモニーは、太鼓集団「ふじ」の迫力あるパフォーマンスで幕を開けました。鈴木恒夫藤沢市長のビデオ挨拶、藤沢市観光協会の湯浅裕一会長、さらに、本学の新美潤副学長（グローバルスタディーズ学部長）、国際社会学会国際観光部長 Anke Winchenbach 博士・加藤久美教授が挨拶を行いました。その後、オーストラリア・タスマニア大学の Can Seng Ooi 教授による基調講演「権利の対話的な理解」が行われました。学会期間中は、Breakout Session が開催され、SGS の学生スタッフが参加者と交流しながら、参加者のサポートなどの学会運営を担いました。学生スタッフたちには、和歌山大学の教員たちからサプライズで、感謝状が授与され、大きな励みとなりました。



オープニングセレモニー(堂下先生)



SGS教員の発表



英語で発表をする大室さん



感謝状を授与された学生たち

教員研究紹介

フィールドから考える観光と社会のかたち

グローバルスタディーズ学部 准教授 ^{タナカ タカエ} 田中 孝枝

2015 年 3 月、東京大学大学院総合文化研究科博士課程を単位取得退学。2018 年 7 月、東京大学大学院総合文化研究科にて博士学位（学術）を取得。博士課程在学中に中国中山大学へ留学。昭和薬科大学、慶應義塾大学、帝京大学などで非常勤講師。2015 年 4 月より現職。専門は文化人類学、観光研究、フィールドは中国、台湾、香港、日本など。主な研究テーマは、日中観光ビジネス、リスク・不確実性、復興ツーリズム。



文化人類学の視点から、観光が社会や文化に与える影響について研究しています。観光は娯楽であり、経済活動であると同時に、移動や交流を通じて地域社会の再構築や歴史の語り直しに深く関わる営みでもあります。グローバルなモビリティが高まった現代においては、「移動」が社会をつくり出すという見方も広がっており、日本でもインバウンド観光客の増加を通じて、その実感を得る場面が増えています。

近年は、中華圏および日本をフィールドに、観光に内在する「リスク」や「不確実性」に注目し、日中間の観光交流や災害後の復興ツーリズムについて研究しています。災害や政治的緊張、異文化間の摩擦といった不確実性が、現場でどのように認識され、乗り越えられているのかを、フィールドワークを通じて明らかにしようとしています。

リスクや不確実性は、管理すべき課題であると同時に、新しい発想や挑戦を生み出すきっかけにもなります。新型コロナウイルスの流行時には、マイクロツーリズムやオンラインツーリズムなどの新しい観光形態が登場しました。バックパッカーの旅やアドベンチャーツーリズムのように、リスクそのものが人々を惹きつける資源となる場合もあります。

こうした研究は教育とも深く結びついており、ゼミでは福島を訪れて復興まちづくり活動に参加するなど、現場に根ざした学びを大切にしています。今後も学生とともにフィールドに足を運びながら、観光を通じて社会や文化を捉え直す視点を育んでいきたいと思います。



四川大地震の被害を保存した地震遺跡



ゼミで福島・中間貯蔵施設を見学

報告

済州平和フォーラム研修を通じた多摩大生の挑戦と成長

2025年5月27日から6月1日にかけて、韓国・済州島で開催された「第20回済州平和フォーラム」および現地研修に、多摩大学の学生27名が参加しました。経営情報学部から21名、グローバルスタディーズ学部から6名が参加し、中には、中国・韓国出身の留学生5名も含まれ、様々な価値観や文化を持つ学生たちが国際社会の一端を体験しました。

学生たちは、東アジアの平和と繁栄をめざす国際的な基調講演やディスカッションを通じて、多国間対話の現場を肌で体感し、国際関係やビジネス ICT 分野に対する理解を深めるとともに、アジアにおける協力と発展についての知見を広げることができました。

また、済州国際平和センターの視察や、協定校である済州漢拏大学との交流会も行われ、本学から同大学に交換留学中の学生（経営情報学部3年生）が活躍していました。日韓学生交流会では、文化や価値観の違いを超えて、相互理解と友好関係の構築に向けた活発な意見交換が行われました。

国際情勢が不透明さを増す中、本フォーラムでは多国間協力の重要性を再確認することができ、学生たちは積極的に議論へ参加し、質問や意見発表を通して、多様な視点を受け入れる柔軟性と発信力を養う貴重な経験を得ました。

本研修を通じて、学生たちは「海外で学ぶ」ことの意味と価値を実感し、今後の学びやキャリア形成に向けた確かな一歩を踏み出すことが期待されます。



第20回済州平和フォーラム開催



済州平和フォーラムにて質疑応答する学生



済州国際平和センター参観ツアー

済州平和フォーラム研修に参加した学生の体験記

国境を越えた可能性の広がり

経営情報学部 4年 井上 慶太郎

済州研修では、市街地観光や日韓学生交流会、済州平和フォーラムへの参加を通して、多くの学びと気づきを得ました。特に印象に残っていることは、「出会いと交流」、そして「済州平和フォーラムでの学び」の2つです。

日韓学生交流会では、互いの文化や学びについて意見交換を行い、理解を深めました。

私は、神輿を担ぐ衣装で多摩大学での学びや成果を発表し、韓国の学生から大きな関心が寄せられました。昼食や夕食には、韓国料理を楽しみながら、韓国の大学生や附属高校生と親しく交流することができました。また、同じ大学の学生同士でも新たな出会いがあり、学内交流のきっかけにもなりました。

済州平和フォーラムでは、国際問題や経済、食と農に関する講演や対談を通じて、世界が直面している課題への理解が深まりました。トランプ政権下での国際秩序や、経済成長のあり方について、第一線で活躍する専門家の講演を直接聞いたことは貴重な経験です。さらに、済州国際平和センターを訪れることで、平和の大切さにも改めて気づかされました。

今回の研修を通じて、私は将来、国際社会で活躍できる人材になりたいという目標を強く持ちました。そのためにも、知識の習得に加えて、語学力を高め、多様な人々と交流できる力を養っていきたくと考えています。



開幕式で登壇されていたグローバルリーダーとの交流



「食と農のアジアの未来ビジョン」のセッションにて元農林水産大臣へ質問



日韓学生交流会で、日本の伝統衣装を着用しながら「多摩大学での学び」を発表

2025 年度 第 1 回 SRC (Student Research Conference)

2025 年 7 月 31 日、多摩キャンパスにて「2025 年度 第 1 回 SRC (Student Research Conference)」が開催されました。SRC は経営情報学部がホームゼミにおける研究成果を発表する場として年 2 回（夏・冬）実施されています。

今回の SRC では、100 件を超える卒業研究や論文が発表され、その研究テーマは、多岐にわたり、学生たちが多様な視点から社会課題に取り組む姿が感じられました。

質疑応答では、発表を聴講した学生から「研究の背景は？」「今後の展望は？」「地域とどのように関わっていくのか？」など活発な質問が寄せられました。また、教員からは「研究の社会的な意義をより深めてほしい」「自分ならではの視点で調査研究を進め、次回はさらに魅力的な発表を期待しています」といった助言があり、研究を発展させるための貴重な学びの機会となりました。

さらに、パネルディスカッションでは、学生と教員との間で熱い議論が交わされました。

本学では、今後も SRC を通じて学生の探究心を育み、地域社会や学術に貢献する研究活動を支援してまいります。



○学生の発表テーマや内容につきましては、右記の QR コードよりご確認ください。URL : <https://src.tama.ac.jp/>



インターゼミ（社会工学会）夏季合宿

2025 年 8 月 25・26 日の 2 日間、多摩大学インターゼミ（社会工学会）の夏季合宿を箱根で開催し、学部生 23 名、社会人大学院生 5 名、大学院修了生 2 名、教員 12 名が参加しました。

初日は、4 つの班が各研究テーマに基づき、文献研究やフィールドワークの成果をもとに課題を整理し、提案を発表しました。各班のテーマは、多摩学班「潤多摩『外国人は多摩地域に來たる？』」、アジアダイナミズム班「『ボックス・モンゴリカ』時代の文化交流史」、サービス・エンターテインメント班「多角的に捉えた地域活性化～沖縄の過去・現在・未来～」、DX 班「生成 AI と DX による社会的弱者支援の可能性」です。

発表後には、学生と教員の間で活発な質疑応答が行われ、学際的かつ実践的な議論が展開されました。

寺島実郎学長からは、各班に的確なアドバイスと温かい激励の言葉が贈られ、学生たちの学びを一層深めました。

2 日目の寺島実郎学長の講話では、課題解決力の基盤となる「全体知」の重要性および、専門知・総合知・全体知を統合し、これからの時代に求められる知とは、優先順位を見極める力（インテグレイト）であると強調されました。その力を身につけるには、的確な歴史認識を持ち、世界の中で自分自身の立ち位置をどう捉えるかが大切であるとゼミ生に強く伝えました。

今回の合宿は、多様な価値観に触れ、研究テーマをさらに発展させる貴重な機会となりました。参加学生たちは、今後の学びやキャリア形成に活かせる示唆を多く得ることができました。



インターゼミ生の発表



寺島実郎学長の講評

多摩大学インターゼミについて

多摩大学インターゼミは、学部・学科の枠を越えて学生と社会人大学院生、教員が集い、多角的な視点で研究を行う場です。フィールドワークと文献研究を基盤に、実社会に直結したテーマに取り組むことを特色とし、寺島実郎学長の直轄ゼミとして展開しています。

情報科教職課程の教育実習を通して得た学び

経営情報学部 4 年 工藤 悠希

約 3 週間の教育実習は、教育者としての成長を実感する貴重な時間となりました。担当は 1 年生全クラスと 2 年生一部のクラス。授業準備や教材作成を行い、1 年生では情報モラルを、2 年生ではタブレットを使ったプログラミング（スクラッチ）を指導しました。授業では演習やグループディスカッションを取り入れ、生徒の理解度に応じた個別指導やフィードバックを心がけました。

教師の仕事は授業だけでなく、生徒指導や会議など多岐にわたります。特に印象的だったのは、授業中は発言の少ない生徒と、放課後や休み時間の交流を通じて少しずつ距離が縮まったことです。この経験から「一人ひとりに寄り添う姿勢」の大切さを実感しました。

授業づくりの難しさにも直面しました。今回は、「情報Ⅰ」（プログラミングやネットワークなどの基礎知識）が中心で、1 年生 1 組から 6 組を担当しました。最終日には 2 年生の約 75 人を前に「情報Ⅱ」（情報技術の発展や情報システム、多様なデータの活用など）にあたるプログラミングをタブレットで行う授業を実施しました。生徒が飽きないようにスライド資料を工夫し、分かりやすく伝える方法を試行錯誤する中で、「教える」ことは、一方通行ではなく、生徒の反応を見ながら常に改善を重ねるものであると感じました。生徒一人ひとりが個性を大切にしながら高校生活を送っている姿からは、自分たちの高校時代とは異なる新たな一面を見ることができました。

先生方の助言や生徒との関わりから得た経験は、今後の教育活動の大きな糧となります。「教える楽しさ」と「人と向き合う重み」を胸に、これからも情報教育の発展に貢献していきたいと思います。



教職実習の様子



教職支援室にて自習中

英語と向き合い続けた 4 年間

グローバルスタディーズ学部 4 年 樋園 隼一

「英語を話せるようになりたい」——そんな思いでこの大学に入学しました。

1・2 年次には AEP（アカデミック・イングリッシュ・プログラム）という英語を集中して学べるプログラムを通して英語を体系的に学び、日々英語に触れながら努力を重ねてきました。思うように英語力が伸びず悩んだ時期もありましたが、先生方に支えられ、学び続けることができました。中でも、教職課程では山田大介教授に特にお世話になりました。4 年間を通して私の成長を促す言葉をかけてくださり、私の視座を高めてくださいました。本当に感謝しています。

3 年次にはニュージーランドへ語学留学をし、大きな転機を迎えました。これまで私が勉強してきた英語が現地の人々には伝わらないという挫折を味わいました。また、ネイティブの人たちが話す英語は本当に速く、聞き取るのがとても難しかったです。そんな中でも、めげずに英語学習を続けました。その結果、少しずつネイティブの人たちが話している内容がわかるようになり、さらに口から英語がスラスラと出やすくなりました。この体験が今の私の英語を話す自信につながっていると思います。

留学を経てから、さらに英語が好きになったほか、人々とコミュニケーションをとることが楽しくなりました。また、ホームステイをしながら現地の人々と生活を共にすることで、ニュージーランドの文化を直接見て、体験することができました。当初は「英語力を伸ばすこと」が目的でしたが、結果的には自分の価値観を広げるかけがえのない経験となりました。



ニュージーランド 追憶の橋



英語の授業風景



ニュージーランド テカボ湖

グローバルスタディーズ学部

今村 康子 ゼミ

今村 康子 (イマムラヤスコ) 准教授 プロフィール

慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科修士課程修了 修士（システムデザイン・マネジメント学）。全日本空輸株式会社（以下、ANA）で客室乗務員として25年間勤務。接遇の最前線で培った経験と知識を基に、システムデザイン学のアプローチを用い、人の心を動かす優れた顧客体験（カスタマーデライト）を創出するサービスデザインの研究に取り組んでいます。また、社会のさまざまな場面でホスピタリティを活かす方法の探究にも力を注いでいます。



実践的に学ぶサービスデザイン

今村ゼミは、「優れた顧客体験の創造」に重点を置き、実践的にサービスデザインを学ぶゼミナールです。「顧客視点」と「価値共創」を軸に、課題の本質を見極め、人々の心を動かすサービスや製品、そしてそれらを生み出し続ける仕組みについて研究しています。

航空、観光、地域創生など幅広い分野で、企業や自治体と連携し、サービスの企画から開発、提供までの一連のプロセスを体験。仲間や地域、業界のプロフェッショナルと交流しながら、これからの社会に求められる「新たな価値を創造する力」を育てています。

〈具体的な取り組み〉

◆ 航空会社・ホテル訪問、プロフェッショナルとの交流

ANA、ANA 成田エアポートサービス株式会社、株式会社パレスホテル（以下、パレスホテル）、MAISON CACAO 株式会社を訪問。さらに株式会社日本旅行や全日空商事株式会社からゲスト講師を迎え、第一線で活躍するプロフェッショナルと交流します。

◆ 株式会社ソラシドエアと連携した地域価値共創プロジェクト

株式会社ソラシドエア（以下、ソラシドエア）、自治体、淑徳大学と連携し、宮崎県の地域課題解決に取り組んでいます。夏季に

は宮崎合宿を行い、秋に開催されるソラシドエア主催の「グリーンスカイフェスタ」で地域の魅力や特産品のPR活動を実施します。

◆ 株式会社小田急 SC ディベロップメントと連携した“みらい畑マルシェ”

藤沢市をはじめとする湘南地域の農業の担い手不足という課題に対し、子どもから大人までが農業にふれ、地元農業の魅力や大切さを体験できる場を創出。地元に着目したマルシェを通じて、地域と共に新たな価値を育むプロジェクトに取り組んでいます。

◆ 学部を超えた合同ゼミ

他学部との合同ゼミも積極的に行っています。経営情報学部・樋笠ゼミと合同で、自動運転におけるルール形成やサービスエクセレンスの視点から国際標準(ISO)について学び合いました。また、株式会社たきコーポレーションの藤井賢二氏を講師に迎え、経営情報学部の新西ゼミ・樋笠ゼミと合同で「社会課題解決のためのデザインワークショップ」を実施。さらに、グローバルスタディーズ学部・山田ゼミと合同で台湾研修を企画するなど、異なるゼミの学生と積極的に交流し、相互に学びを深めています。



パレスホテル訪問



ANA訪問



宮崎合宿にて市内観光



2024 ソラシドエア主催グリーンスカイフェスタ

●グローバルスタディーズ学部4年 尾崎 菜瑠実

私が今村ゼミを選んだ理由は、先生が元客室乗務員としてご活躍されていた経歴があり、私自身も航空業界への関心をさらに深めたと思ったからです。ゼミのテーマ「実践的に学ぶサービスデザイン」にも強く共感し、志望しました。

活動の中で特に印象に残っているのは、ソラシドエアと宮崎県自治体との産官学連携プロジェクトです。現地を訪れ、地域の方々と交流し、特産品を味わうことで魅力を五感で体験しました。また、ソラシドエア主催イベント「グリーンスカイフェスタ」では西米良村ブースを担当し、リーフレット制作やPOP作成、販売を通じ広報から接客まで実践的に学ぶことができました。さらに、課題を議論し提案にまとめる過程を経て、「伝える力」や「課題解決力」が大きく成長したと感じています。現在は藤沢市でのマルシェ企画にも携わり、地域の価値を広げる活動にやりがいを感じています。今後も人と地域、人と人をつなぐ存在を目指して挑戦したいです。

●グローバルスタディーズ学部3年 栗原 義人

私が今村ゼミを選んだ理由は、ゼミが掲げているサービスデザイン「優れた顧客体験」を学びたいと思ったからです。私は国際教養コースを選択していますが、将来どのような職種に就いたとしても、人と人、人と社会との関わりは避けられないと考えています。そのため、社会における価値提供の本質を学ぶことが重要だと思い、サービスデザインに惹かれました。

今、力を入れて取り組んでいることは、農業の魅力や大切さを伝えることを目的に立ち上げた「みらい畑マルシェ」の活動です。藤沢市の地域課題に着目した取り組みを通して、市内の大学に通っていても気付かない課題を知り、地元の人たちと協力することで解決していく活動を重ねる中で、自主的に人や社会と関わろうとする力が身についたことも大きな成長だと感じています。今後は体験価値づくりの視点を意識しながら、マルシェをより大きく発展させ、地域に貢献できる活動へと広げていきたいです。

ジェロントロジー企画 第15弾「稲刈り体験 × 講座」

2025年9月7日、多摩大学では「寺島実郎監修リレー講座」受講者を対象に、山梨県南アルプス市との連携事業「稲刈り体験 × 講座」を実施しました。

本企画は、本学が取り組むジェロントロジー（高齢化社会学）の一環として行われたもので、高齢社会における「食」や「農」を通じた社会参画の新しい形を検討することを目的としています。

当日は、南アルプス市下市之瀬地区にて、地元農家・櫻田力氏の指導のもと、一般参加者9名、学生7名、教職員8名の計24名が参加しました。5月に植えた苗が実り、地域の方々とともに稲刈りを行うことで、収穫の喜びを共有し、お米の大切さを改めて認識することができました。

また、稲刈り後には南アルプス市教育委員会文化財課の斎藤秀樹氏を講師に迎え、戦時中に御勅使川扇状地に造られた秘密飛行場「ロタコ」について学び、地域の歴史に触れる機会となりました。

本学は、今後もジェロントロジーを基盤とした教育・研究を通じて、地域社会と連携し、高齢社会における新たな価値を創出しながら、学びを社会貢献へとつなげてまいります。



軽快な手さばきで収穫中



参加者の集合写真

多摩大学多摩キャンパスが地域防災拠点としての役割を担う

寺島実郎学長メッセージ

多摩大学は2024年度に開学35周年を迎えました。地域に密着した大学であり続けたいと思い、35周年を機に地域のレジリエンス（耐久力）に貢献する大学としても一歩踏み込みたいと考えています。4つのプレートの上にある日本は、地震から免れることはできません。これまでの大地震で「水」「電力」「食料」「避難所（トイレ）」が緊急時に必要なことを我々は目の当たりにしました。多摩市と連携して多摩大学が果たすべき役割を考え、実装に向けて真剣に取り組んでいます。

多摩大学多摩キャンパスは、地域社会の防災拠点として、多摩市と連携し災害時の安全確保に貢献しています。2024年2月には、多摩大学・附属聖ヶ丘中学高等学校と多摩市が「災害時における避難所等施設利用に関する協定」を締結。大規模災害には、多摩大学の施設が指定避難所や緊急避難場所として活用されます。

大学敷地に隣接する「応急給水拠点」では、大地震発生時に安心安全な飲み水を供給。また、大教室に備えた独立型給水槽（6,000リットル）で、最大900名の避難者に対して3日間対応可能です。衛生面も配慮し、消毒用品1,000人分を完備しています。さらに、太陽光パネルを活用した電力供給設備により、避難者や学生がスマホやPCを充電できる環境を整えています。多摩大学多摩キャンパスは、地域社会との連携をさらに深めてまいります。

防災拠点としての多摩キャンパスの役割と取組（一部紹介）



太陽光パネルを利用した災害時の電力提供

再生可能エネルギーを利用した電力を蓄電し、災害時に避難者の方々に提供できるようにします。



太陽光パネル



太陽光発電システム



蓄電池



EVバス

多摩大学 防災拠点化構想については
こちらをご覧ください。



学園祭のお知らせ

多摩キャンパス

経営情報学部

第37回 多摩祭

ハロウィンパーティー2025
人間もオバケも、全員集合！

2025年10/25(土)



湘南キャンパス

グローバルスタディーズ学部

第19回 SGS Festa 2025

New Type of SGS Festa
～ようこそ、Level upした学園祭 ver.2025へ～

2025年11/2(日)



経営情報学部

「後援会定期総会・教育セミナー」開催

2025年6月29日、多摩キャンパスにて、経営情報学部保証人（ご父母）を対象とした「2025年度後援会定期総会・教育セミナー」（後援会主催）を開催しました。

○後援会定期総会

「第1号議案 2024年度事業報告及び決算報告」「第2号議案 2025年度事業計画及び予算」「第3号議案 2025年度後援会役員選任」について承認されました。

○教育セミナー 第1部

(1) 挨拶：小林 英夫 経営情報学部長

「昨今では学生の提出する期末レポートの構成や内容に生成AIを利用したケースが増えてきていますが、様々な技術を活用し、思考力を発展させることも能力と捉えています。また、本学では就職支援戦略室を開設し、就職後の働き方や資質を伸ばすための大学教育にも力を入れています」

(2) カリキュラム（各種要件等を含む）に関する説明：落合 孝彦 教務委員長

1. 多摩大学の「基本理念」（国際性、学際性、実索性）、2. 本学部（学科）の「育成する人材」、3. 本学部（学科）に見るカリキュラムの特徴、4. 単位修得等に係る諸規則についてお伝えしました。

(3) 多摩大学の活動紹介等：樋笠 堯士 広報委員長、新西 誠人 広報委員

松本ゼミ、長島ゼミ、インターゼミ等の活動、令和サバイバーキャンプ、マチカドこども大学®、新宿駅・都庁での自動運転実験、社会福祉協議会からの表彰、学生の国際学会での英語による研究発表、公務員試験合格、教員研究や済州島研修、など学生や教員の活動について紹介しました。

(4) 学生が語る。多摩大学の留学プログラム：平石 隆司 国際交流副委員長

海外研修や短期留学・長期留学・交換留学など多摩大学の留学プログラム体系について説明、経営情報学部3年の吉川莉里さんが、2年次秋学期のオーストラリア留学経験を発表しました。

○教育セミナー 第2部 ゼミ別懇談会・事務局相談（教務関連）

ゼミ別に会場となる教室に移動し、保証人とゼミ担当教員が学習等について懇談を行いました。



後援会定期総会



小林学部長の挨拶 落合教務委員長による説明



留学経験を発表する学生



ゼミ別懇談会の様子

グローバルスタディーズ学部

「第17回後援会定期総会」開催

2025年6月14日、湘南キャンパスにて、グローバルスタディーズ学部「第17回後援会定期総会」を開催しました。後援会定期総会終了後には、グローバルスタディーズ学部の教育方針の説明、今村康子准教授による講演があり、学食体験後の午後からは個別相談が行われました。

○後援会定期総会

「第1号議案 後援会会則の改正について」「第2号議案 2024年度事業報告および決算報告」「第3号議案 2025年度後援会役員の選任」「第4号議案 2025年度事業計画および予算」について承認されました。

○教育方針：新美 潤 グローバルスタディーズ学部長

学部の学生数は593名（男子367名、女子226名、2025.5.1現在）、2024年度卒業生134名、就職率（名目）96.4%。教育方針として、目標はグローバル人材の養成（コミュニケーション力と課題解決力を身につける）。特色は英語教育、少人数教育、実学性、国際性。3つのキャリアパスとして、ホスピタリティ・マネジメントコース、国際教養コース、教職課程。学部には8カ国からの留学生104名が在籍。6月20日～22日にかけて、国際学会のホストを担うなど現況を説明しました。

○講演「エアラインの安全の追求とホスピタリティの交錯」：今村 康子 准教授

今村准教授は、全日本空輸株式会社（ANA）に客室乗務員として入社し、国際線を中心に乗務。マーケティング室商品企画部、成田客室部管理職、本社商品企画室、ANA総合研究所客員研究員を経て多摩大学教員に就任。講演では、1. 客室乗務員の役割～羽田空港事故の考察～、2. 航空業界の安全への取り組み、3. ホスピタリティ・マネジメントと安全、の項目で、2024年1月の羽田空港衝突事故等を事例にしつつ、「安全」は究極のホスピタリティであることを説きました。

○個別相談

相談内容（履修・成績、学生生活、留学、就職）ごとに教室を分け、保証人と教職員が学生の学習や生活などについて個別に話し合う機会となりました。



後援会定期総会



新美学部長による教育方針の説明



今村准教授の講演



個別相談の様子